

はじめに

大河ドラマ「鎌倉殿の13人」に登場した伊豆山権現と文(聞)陽房覚淵  
…源頼朝と北条政子の「駆け落ち」はなし →『曾我物語』の創作 ただし夢見の場  
頼朝挙兵時に覚淵がはたした役割は看過できず …政子とのつながりも  
覚淵は挙兵に参加した加藤景員の子息で光員・景廉の兄弟とされる  
→覚淵は走湯権現の中核にある僧侶ではない …覚淵の密厳院は走湯権現とは別組織  
12世紀からの走湯権現とその有力僧の研究が近年深化 …平雅行氏・岡野浩二氏ら  
→反乱軍たる頼朝軍の挙兵から勢力拡大、軍事政権の成立に走湯権現が果たす役割大  
※戦争は軍事のみならず神仏も動員。戦時から平時への移行にも寺社は不可欠な役割。

## 1. 南関東の武士ネットワークと走湯権現

走湯山と草創期の幕府との関係でより重視すべきは良遍と源延=天台系僧 貫主とも  
『新猿楽記』(11c半ば): 験者の修行地、『梁塵秘抄』(12c後半): 有数の靈験所  
12世紀末段階で走湯山は比叡山延暦寺の末寺 ただし台密・東密の僧侶などが混住  
→同じく延暦寺末社の白山社と走湯権現との結びつき  
Cf. 12cには陸奥国紫波・高水寺に走湯権現と白山社がセットで勧請(『吾妻鏡』)  
じつは源延も加藤景員の子息(=覚淵と兄弟) …1156年頃に伊豆山で誕生との記録  
浄蓮房源延: 比叡山東塔の安居院澄憲に学ぶ …醍醐寺小野流や法然との接点も  
→伊勢に本拠を持つ加藤景員が伊豆の工藤介茂光との縁で牧郷に入る時期と重なるか  
※12世紀には走湯権現が南関東の有力武士からも崇敬を集めていたことの証左  
『吾妻鏡』や聖教にみえる源延の南関東での活動や武士とのつながり(加藤氏以外)  
・1181年1月18日 三河国船形寺の覚智から走湯山東明寺で聖教を授かる  
・1213年4月15日条 和田朝盛(義盛孫) 剃髪の導師  
・1216年以前 相模国西郡松田に西明寺を建立(『灌頂持誦秘録』長楽寺)  
・1216年以後か 上総国にて談義を行う(『日本大師先徳明匠記』逢善寺)  
・1224年6月22日条 北条義時追善供養(三浦義村主催)の導師  
・1224年8月8日条 北条義時墳墓堂(新法花堂)落慶供養の導師  
・1229年2月21日条 三浦義村主催の来迎講(三崎海上)導師 …阿弥陀信仰  
Cf. 1247年に三浦義村の子良賢が京都から伊豆山に籠り幕府への謀叛企図  
熊谷直実の祖とされる「阿多見四郎聖範」の北条氏出自説も含めると北関東にも波及  
※源延の南関東の海上交通も意識した活動や人的ネットワークの前提には源頼朝挙兵  
以前からの結びつきがあり、それが頼朝の挙兵から幕府草創期を支えた側面も  
Cf. 南関東の「内海」を通行する走湯山燈油料船 →頼朝からも安堵

## 2. 軍事政権としての鎌倉幕府と走湯権現

鶴岡八幡宮の別当良暹（阿闍梨） → 退任後は走湯権現の貫主に（源延はその後継者）

1180年10月 鎌倉に入った頼朝は良暹を鶴岡の別当に（1182年9月円暁任命まで）  
初期の鶴岡八幡宮や祈祷体制の整備に尽力

1181年8月 鶴岡八幡宮・走湯権現・箱根権現に頼朝から長日祈祷の指示

1182年8月 北条政子の頼家出産に御験者として立ち合い

1185年8月 義朝遺骨を迎えて勝長寿院に埋葬

1187年4月 後白河院病悩平癒の大般若経転読の指示

1190年 奥州侵略に際して戦勝祈祷、頼朝邸の後山に観音堂建立 → 法華堂へ

1193年3月 後白河院周忌の千僧供に宿老僧のひとりとして百僧を率いて出仕

※頼朝により移転・整備された鶴岡八幡宮＝権力の荘厳・儀礼空間・宗教的イデオロギー  
→その成り立ちは走湯山からの援助なしには成り立たず

二所詣：源頼朝による箱根・伊豆・三島への参詣 …院による熊野詣の模倣？

1188年開始時のルート：（鎌倉～）伊豆山～箱根山～三島（～鎌倉）

1190年の変更後ルート：（鎌倉～）箱根山～三島～伊豆山（～鎌倉）

・鎌倉～箱根～三島という東海道メインルートの整備→御家人らによる宿立て

※箱根路・足柄路とは異なる重要ルートとしての三島一伊豆山一西相模

陸上交通の要衝としての走湯山

熊谷直実の出奔事件

中世東海道の3つのルート：(1)足柄路、(2)箱根路、(3)西相模一伊豆山一三島

『吾妻鏡』建久3年（1192）11月25日条 → 実は文治3年（1187）～5年の間

・熊谷直実と久下直光との頼朝御前における境相論の対決

・梶原平三景時が直光に引継→熊谷直実が髻を切って西方に逐電

・直実が京都に向かうと考えた頼朝の命令

「則ち雑色等を相摸・伊豆の所々ならびに箱根・走湯山等へ馳せ遣わす。直実の前途を遮て、遁世の儀を止めるべきの由、御家人及び衆徒等の中に仰せ遣わさると云々」

『吾妻鏡』建久3年（1192）12月11日条

「走湯山住侶専光房、使者を進め申して云わく、直実の事、御旨を承るに就きて、則ち海道に走り向かうの処、上洛を企てるの間、忽ち然して行き逢いおわんぬ。既に法体たる也。（後略）」

・専光房＝良暹が直実を発見・説得 …直実（法然弟子）と走湯山との交流が前提に  
西相模と伊豆・三島をつなぐ走湯山

『吾妻鏡』治承4年（1180）8月19日条

「土肥辺より北條へ参るの勇士等、走湯山を以て、往還の路と為す。仍て、多く狼藉を見すの由、彼山の衆徒等参訴の間、武衛、今日御自筆の御書を遣はされ、これ

を宥め仰せらる。世上無為に属すの後、伊豆一所、相模一所、庄園を当山に寄せ奉らるべし。」

・頼朝は実際に伊豆国馬宮庄（九条家領）＝三島の南方を伊豆山に寄進

・頼朝時代の伊豆山奉幣使は土肥氏と仁田氏（初期の熱海郷地頭）

・『曾我物語』真名本（13c 末）に描かれる湯治ルート

和田義盛（東相模の武士）らが安多美（熱海）→早川→湯本と湯めぐり

直実は走湯山との関係から西相模－伊豆山－三島ルートを意図的に選択したのでは  
※鎌倉と京都を結ぶ街道（軍事道路の性格も）の整備と要衝としての走湯山の役割

### 3. 鎌倉幕府の権力伸長と走湯権現

走湯権現の鎌倉幕府直轄化（将軍家御願寺化とも）…延暦寺末寺としての性格払拭

ただし北条泰時からは北条氏嫡流（のちの得宗家）との関係が徐々に強化

熱海（阿多美）郷地頭職の寄進（1213 年）、走湯権現再建の依頼（1229 年）

→執権職を梃子とした得宗家による幕府政所の掌握とも関連

舞姫・神楽用途、祈祷供料などを政所が管轄（『鏡』寛元 2 年正月 11 日条ほか）

走湯権現の焼失と再建

『走湯山上下諸堂目安』（1327 年成立）：1197 年～1230 年における走湯権現の造営

1197 年・1219 年・1228 年には政子や竹御所らが源延を代官として再建に関与

1198 年に頼朝は「諸大名等」に柱一本ずつ寄進するよう命令 Cf. 大名・小名

→いわゆる「大名賦課」とよばれる幕府の賦課方式…有力御家人への割り当て

走湯山造営費用負担の御家人役化

1267 年（文永 4）と 1296 年（永仁 4）の焼失と再建

・1279 年 走湯山造営用途の負担をめぐる薩摩国谷山郡司らの訴訟

・1298 年 播磨国大部庄で走湯山・鶴岡八幡宮の造営用途が百姓に転嫁

※13 世紀末には西国・九州の本所進止所領でも在地への転嫁が容認

→鎌倉幕府の権力が西日本に拡大していくうえで走湯権現が象徴的役割を担う

走湯山造営用途の負担を理由に京都大番役の免除を訴える御家人も出現

Cf. 諏訪大社の祭礼頭役負担 …大番役の免除をともなう

走湯権現を西国の所領に地頭御家人が勧請するケースも

御成敗式目制定時の評定衆起請文に伊豆（走湯）・箱根・三島が登場

→御家人たちの起請文の神文にも採用されていく

※御家人たちの意識統制にも走湯権現の権威を利用

おわりに

中世における走湯権現の堂舎の存廃状況や史料・聖教の悉皆的把握など総合的な調査と研究がまたれる →熱海周辺地域のみならず関東全域、さらに列島規模での貢献へ

おもな参考文献（副題は省略）

岡田精一「鎌倉幕府と伊豆走湯山」（『鎌倉』59号，1988年）

岡野浩二「聖教奥書からみた僧侶の往来」（『中世地方寺院の交流と表象』塙書房，2019年）

鴨志田美香「『走湯山縁起』について」（『昭和女子大学生生活機構研究科紀要』Vol.7，2002年）

笈 雅博「得宗政権下の遠駿豆」（『静岡県史』通史編2中世，静岡県，1998年）

栗木 崇「走湯山別当密厳院と「衆徒」について」（『國學院大學博物館研究報告』38輯，2022年）

坂井孝一『曾我物語の虚構と史実』（吉川弘文館，2000年）

清水 亮『鎌倉幕府御家人制の政治史的研究』（校倉書房，2007年）

平 雅行「鎌倉真言派の成立」（京都学園大学『人間文化研究』40号，2019年）

高橋一樹『東国武士団と鎌倉幕府』（吉川弘文館，2013年）

高橋一樹「中世社会における「熱海」」（『熱海温泉誌』熱海市，2017年）

高橋秀樹「相模武士河村・三浦氏と地域社会」（高橋慎一郎編『列島の地域社会』高志書院，2011年）

田辺 旬「鎌倉幕府二所詣の歴史的展開」（『ヒストリア』196号，2005年）

七海雅人『鎌倉幕府御家人制の展開』（吉川弘文館，2001年）

納富常天「三浦義村の迎講」（峰岸純夫編『三浦氏の研究』名著出版，2008年．初出1967年）

